

平成 30 年度文化財調査報告書

名 称	考古資料調査
文化財名称	佐間小草原遺跡の中世墓群出土遺物 (さまこくさばらいせきのちゅうせいぼぐんしゅつどいぶつ)
管 理 者	久喜市
調 査 者	丸山 謙司
同行職員	
調 査 場 所	※文献による調査
調査年月日	平成 30 年 10 月 17 日～11 月 30 日
概 況	<p>佐間小草原遺跡は、栗橋地区大字佐間字小草原に所在する。(旧栗橋町大字佐間 323 番地) 標高は概ね 10m で、渡良瀬川あるいは古利根川の自然堤防上に位置する。</p> <p>本遺跡の発見は、昭和 44 年 (1969) 土地改良事業の工事中、板碑などが多量に発見された。連絡を受けた埼玉県立久喜高等学校教諭で、考古学研究者の山本良知氏が緊急調査を行った。</p> <p>その結果、地表下約 2 メートルから、板碑 37 基、蔵骨器 2 固体、灯明皿 15 固体が検出され、山本氏は「小草原中世墓地」と命名した。</p> <p>栗橋町史編さん時の平成 17 年 (2005)、遺跡周辺に遺物、遺構が発掘される可能性があることから、昭和 44 年の出土地点と推定される箇所が発掘調査を実施した。</p> <p>その結果、土壙 1 基、溝跡 2 条が検出され、板碑 1 基、瓦片、常滑産の甕片、漆塗りの椀が検出された。板碑は、表土中の出土であるが、前回検出の板碑と類似することから、その強い関連を窺わせた。</p> <p>溝跡は、覆土の観察から区画のものと判断され、日常空間の場から墓域を区切る溝と想定している。また、墓域に隣接して、瓦を葺いた「寺」や「館」の存在の可能性も指摘されている。</p> <p>遺跡の名称は、墓地のみと限定できないことから「佐間小草原遺跡」に改めた。</p>
所 見	<p>佐間小草原遺跡の特徴である多量の板碑が出土すること、墓域を溝で区画していたことを満たす遺跡の例は近隣区域でも少なく、貴重な遺跡である。また、この遺跡から出土した 38 基にも上る板碑や、瀬戸産灰釉瓶子や常滑産の大甕の中世遺物は、市の歴史上重要と認められる考古資料である。</p>

遺物の特徴	<p>○瀬戸 灰釉瓶子 口縁部欠損。淡い緑色の灰釉がかけられた瓶子で、曲線の先端から巻きあがった蕨手文が胴体全面に押印されている。</p> <p>瓶子の中には、火葬された人骨が収められおり、蔵骨器として再利用されたものである。かわらけが蓋として置かれ、周囲は4個の切石で囲まれていた。14世紀後半の生産と推定される。</p> <p>○常滑 大甕 底部欠損。肩部まで自然釉がかかる。内部には集骨された人骨が収められており、蔵骨器として再利用されたものである。大甕には、緑泥片岩製の蓋が置かれおり、周囲は角閃石安山岩などの礫で円形に囲まれていた。14世紀後半の生産と推定される。</p> <p>○板碑 38基（うち1基は平成17年度に出土）板碑は、すべて緑泥片岩の武蔵型板碑であり、彫られた種字はキリクである。紀年銘は、最も古いものが文和3年（1354）、最も新しいものは明応7年（1498）である。また、記され銘から僧俗両者の供養塔が混在していることがわかる。</p>
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・栗橋町教育委員会『栗橋町史』第三巻資料編一原始・古代・中世（2008） ・久喜市教育委員会『久喜市栗橋町史』第一巻通史編上（2015） ・川越市立博物館『第26回企画展 中世陶磁への招待―地中からのメッセージ―』（2015） ・埼玉県教育委員会『埼玉県板石塔婆調査報告書』（1981） ・浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(1)―蔵骨器を中心に―」『研究紀要第3号』（埼玉県歴史資料館 1981） ・愛知県『愛知県史』別編窯業2 中世・近世瀬戸系（2007） ・愛知県『愛知県史』別編窯業3 中世・近世常滑系（2014）



常滑 大甕



瀬戸 灰釉瓶子



板碑 右：永和3年（1354）